日本の石橋を守る会
会報81号(通算)
2012年7月20日発行
題字揮毫　片寄 俊秀

日本のいしばし

緊急寄稿

大震災から1年経過 常磐橋 保存か、撤去か？

日本大学理工学部社会交通工学科　特任教授
日本の石橋を守る会東京都会員　伊東　孝

常磐橋と常盤見附石垣（上流側）　写真提供／伊東孝
常磐橋は1877(明治10)年に架設された石造2連アーチ橋。日本銀行本店前の日本橋川に架かっている

変化の激しい東京だが、東京には明治期に架設された石造アーチ橋が3橋ある。年代順に列挙すると、常磐橋（明治10年）、皇居正門石橋（同20年）、日本橋（同44年）である。日本橋は国の重要文化財、皇居正門石橋は宮内庁管理、常磐橋は常盤橋門跡として国の史跡範囲に含まれている。

ただ常磐橋自体は、建造物的な価値は認められていない。今から30年ぐらい前、常磐橋はなぜ国の重要文化財に指定されていないのか、文化庁に聞きに行ったことがある。そのときの返答は、勾欄（こうらん）が当初のものでない、および、建造物指定（重要文化財）と遺跡指定（史跡）の二重指定は認められていないとのことだった。当時は文化財に対する知識もなかったので、そういうものかと思ったが、今では、それなら勾欄は復元すればいいし、二重指定の例はその後―文化庁の考え方が変わったのかも知れないが―いくつかの事例を見ている。

ところで、東京の明治初期架設の石造アーチ橋について、「材料の石材は、見附（みつけ※1）の枡型（ますがた※2）の石垣を崩して用いられた」と説明されている。私もそれを著作に引用した。ただ疑問がない訳ではなかった。それは常盤橋門跡には現在も、枡型の石垣が残っているからだ。それゆえ国の史跡になっている。それでも上記文を引用したのは、枡型が完全には残っていないことから、石造アーチ橋に用いる分だけ枡形を崩した、または、他の見附を崩した石材を持ってきたと考えられるからだ。そう考えると、枡型の石垣の一部が残っていることの説明がつく。私は今まで、この解釈を披露する機会に巡り合わなかった。

常磐橋は昨年の東日本大震災で、かなりダメージを受けた。釣舟でアーチの下を通ると、以前からあった石組みのずれがさらに広がり、アーチ石が下に飛び出した箇所も見受けられる。常盤橋見附の石垣は、はらみがひどかったため積み直された。

常磐橋の下には以前からゲージがとりつけられ、モニタリングされていることが分かっていたので、大震災の影響について千代田区に聞いてみた。すると、ベンチマーク（※3）にしていた護岸石垣の地盤も橋と一緒に動き、計測ができなかったそうだ。区はあらためて調査をし、その結果を解析して、常磐橋をどうするかを検討するという。

保存を前提とした調査と思っていたが、それについては未決のようだ。危機感を抱く地元の人もいる。

（2012年6月12日）

※1　街道の要所や城門に設置された監視所。
※2　城門前に設けられた四角形の広場。
※3　測量の際の基準点。

中面の案内
2面　第33回大会 熊本・山都町で開催
4面　シンポジウム 日本の石橋を守る
5面　大加勢橋の移設・保存（末永 暢雄）
6面　石橋と石橋をつなぐフットパス（井澤るり子）

第33回大会開催

33 回目となった 2012（平成 24) 年度大会が、去る 4 月 21・22 日、熊本県上益城郡山都町の国民宿舎「通潤山荘」で開催され、全国から約 40 人が参加した。同地での 3 年連続の開催となったが、その間に部が創設され、各活動が行われるようになった。大会では各部の本年度活動計画発表、シンポジウム、会員による活動報告、懇親会などが行われた。最後は場所を同町の緑地広場に移し、昨年度、本会が主催した「肥後種山石工技術継承講座」の受講者により、石割りの実演も披露された。

会場は熊本・山都町

第33回大会会場の様子（撮影／中村まさあき）

各部の活動計画を発表

◇**総務部**（河村　修・部長）

昨年度は肥後種山石工技術継承講座を開催し、6人の技術者養成を行うことができた。本年度もこの事業を継続する。その内容を7月までに確定する予定。また、会の企画運営のあり方や会則の点検も行う。

◇**景観保護部**（上妻 信寛・副部長）

文化財への関心を高め、機会をとらえ、石橋の魅力についてPRが必要。石橋の撤去が検討される前に、その価値の高さを多くの人に認識してもらう活動に努める。

◇**資料整理部**（贄田 岳和・部長）

最新の状況を確認し、日本のめがね橋一覧マスターデータの修正を行う。

◇**広報部**（中村まさあき・部長）

大会写真集発行、会報81号を7月ごろ、82号を来年3月ごろ発行する。加えて「暫定」となっていた会のホームページについて、独自ドメインを取得し「公式」の内容にして情報発信を行う。

なお大会当日、発表者が欠席だったため、後日確認した計画内容は次の通り。

◇**写真文芸部**（石原 史彦・部長）

石橋関連書籍の充実を図る。また、石橋をテーマとした詩歌の募集を行う。

◇**調査研究部**（中村 秀樹・部長）

石橋補修等の事例調査を行い、石橋点検要領（案）を会に紹介する。

第34回大会は宮崎県日南市

来年度の第34回大会は、宮崎県会員の宮田隆雄・重雄ご兄弟の協力により、宮崎県日南市で開催することになった。日南市での開催は2006（平成18）年以来となる。

肥後種山石工技術伝承講座受講者による　石割り実演

山都町の緑地広場での実演風景。左から4人目が竹部師匠。奥は昨年、実習で架けた石造アーチ橋（撮影／中村まさあき）

竹部光春・石工師匠（講座で実技指導）が、石の目を見てチョークで矢穴の場所をマーク。受講者がノミで矢穴を掘り、矢を穴に差し込みゲンノウで数回たたくと、甲高い金属音に似た響きとともに見事、大きな石が2つに割れ、参加者から感動の声が上がった。

平成24年度（第33回）大会プログラム

※敬称略

4月21日（土）

◇開会前　神事　布田神社参拝
　※出席できる会員のみ
◇開会挨拶　実行委員長　浜田 浩二
◇会長挨拶　甲斐 利幸
◇来賓挨拶　熊本県上益城地域振興局
　土木部長　高永 文法
◇通常総会
　議事　議長　本田 博士
　※事業経過報告、決算・監査報告、事業計画、予算案・承認、質疑応答など
◇前年度の部活動報告
◇シンポジウム「日本の石橋を守る」
　～どのように守り、どのように育てていくのか～
　上塚 尚孝（進行役／事務局長）
　高永 文法（上益城地域振興局土木部長）
　増永 慎一郎（熊本県議会議員）
　甲斐 利幸（会長）
　下田 美鈴（会員）
◇記念写真撮影後、夕食および懇親会

4月22日（日）

◇各部企画委員会
　平成24年度の事業計画
　※景観保護部、写真文芸部、調査研究部、資料整理部、広報部、総務部
◇活動報告
　全国の石橋発見報告　贄田 岳和
　平山橋保護活動報告　河村　修
◇特別報告
　肥後種山石工技術継承講座
　スライドによる講座ダイジェスト
　受講者／藤原 孝史、本田 和幸、荒木 大人
◇受講者による石割り実演
　解説　竹部 光春（石工師匠）
　※山都町・緑地広場にて
◇閉会

全国の石橋発見報告

会員　贄田 岳和（宮崎県）

写真・データ提供／贄田 岳和

贄田会員は前回大会後、鹿児島・宮崎県で新たに11の石造アーチ橋を発見。熊本県で1橋の撤去、鹿児島県で2橋の撤去と流失を報告した。

「石橋ハンター」として、これまで車で走行した距離は25万キロに達し、石橋発見のためには、橋の下に潜らなければならないという。「昨年度は鹿児島で10橋発見できましたので、60キロ走るごとに1橋発見できたことになり、効率的でした」と贄田会員は話した。発見の他、会員などからの情報を基に確認した石造アーチ橋10橋の資料も配付された。

「水天渕発電所
余水路2連橋」
鹿児島県霧島市
隼人町嘉例川
橋長6.7㍍、橋幅1.22㍍
径間（東）2.9㍍・（西）2.8㍍
拱矢各0.8㍍、環厚各30㌢
輪石各13列
1906（明治39）年頃架設

「西杉水流橋」
宮崎県県えびの市
大字杉水水流一原田
橋幅5.0㍍、径間1.7㍍、拱矢0.9㍍
環厚43㌢、輪石9列
1892（明治25）年頃架設

斜橋とねじりまんぽ

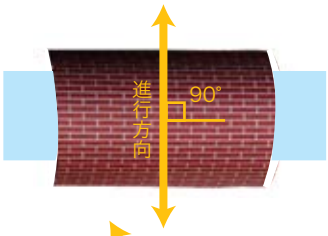
会員　贄田 岳和（宮崎県）

写真・図版・資料提供／贄田 岳和

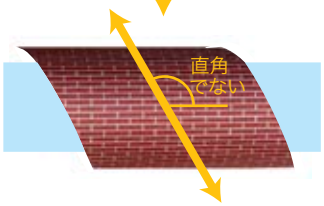
石材やレンガを使ったアーチ橋の中には、珍しい斜橋がある。贄田会員は、その斜橋の輪石の組み方が、2通りあることを報告した。1つは通常のアーチ橋と同様に輪石を組み、斜めに架けられたもの（左図B）。もう1つは路面の進行方向に対し輪石が直角になるよう、角度をつけて組まれたもの（左図C）。

後者のアーチは「ねじりまんぽ」と呼ばれ、このタイプの斜橋の輪石は、布積みでもリブアーチでもなく、アーチを下から見ると、ねじれたように組まれている。大会では、福岡県田川郡香春町のJR日田彦山線「欅坂橋梁」（けやきざかきょうりょう）などが紹介された。

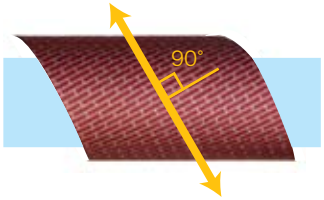
アーチ橋の斜架角



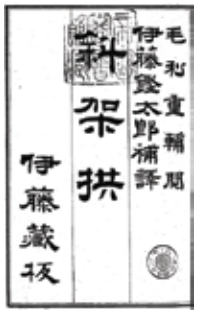
A. 通常のアーチ橋
※路面の進行方向に対し直角となる組み方



B. 通常の斜橋
※路面の進行方向に対し直角にならない組み方



C. ねじりまんぽの斜橋
※路面の進行方向に対し直角となる組み方



「斜架拱」（明治32年発行の解説文の一部を現代文に改めた／広報部）

斜架拱とは、鉄道や水路などの中心線に対し、斜めに架設するアーチ橋の総称で、形状は半円あるいは欠円、石材あるいはレンガを材料として建築したものである。斜架拱は半円の筒を斜めに切断したような形で、その切断面を正面から見ると楕円形に見える。

※緒言は、次の文で始まっている（原文）。
本書ハ「ジョージ・ワットソン・バック」氏ノ著ハセル「ヲブリイク、ブリッヂ」ヲ基トシ「ニッコルソン」氏「ハート」氏等ノ述ブルトコロノモノヲ参考トシテ譚述セシモノ…

福岡県田川郡香春町のJR日田彦山線の欅坂橋梁。右写真中央のレンガの積み方が、斜めになっている貴重な鉄道アーチ橋

「平山橋」保護活動報告

会員　河村　修（熊本県）

前回大会でも報告された平山橋撤去問題。昨年現地で、石橋のすぐ上流側に、幅の広いコンクリート橋を架ける計画が発表され、下流側の数軒の住民が川の増水時の浸水被害の危険を訴え、石橋の撤去を要求していた。

平山橋は1861（文久元）年に架設され、保存状態も良好だった。本会は地域の区長をはじめ、平山橋保存を望む多くの団体と協議を重ねた結果、橋を移設・保存する方向で県との交渉に入ったが、その移設費用の問題が決着しなかった。そのため、石橋を復元できるよう解体・撤去し、現在は石材を保存しいることを、河村会員は報告した。復元へ向けた手だてが求められている。

解体・撤去される前の平山橋（下流側）。石材に番号が振られていた。（2012年3月8日、撮影／中村まさあき）

（4面につづく）

シンポジウム　日本の石橋を守る

～どのように守り、どのように育てていくのか～

シンポジウムの様子。奥左から、上塚氏、増永氏、高永氏、甲斐氏、下田氏

大会では上記のテーマで、シンポジウムが開催された。上塚尚孝・事務局長が進行役を務め、下の４氏が、石橋保護の現状や課題、本会が推進している若手石工技術者養成事業の今後のあり方などについて、それぞれの立場から意見を述べた。以下にその要旨をまとめた。（広報部）

上塚 尚孝（進行役／事務局長、東陽石匠館館長）　※敬称略
高永 文法（ゲスト／上益城地域振興局土木部長）　増永 慎一郎（ゲスト／熊本県議会議員）
甲斐 利幸（会長、山都町町長）　下田 美鈴（会員、山都町立図書館館長）

石工技術継承の機会を　下田氏
理解者増やす努力必要　甲斐氏
地元の石橋保護を支援　高永氏
技術者育成へ環境整備　増永氏
若手の育成待ったなし　上塚氏

上塚　肥後種山石工技術継承講座では、下田さんは実習場にもよく顔を見せておられましたね。

下田　私が出演するＮＨＫラジオの番組で、講座のことを紹介しようと思い、現場を見させてもらいました。竹部光春・師匠は「通潤橋を架けた宇市さんも丈八さんも、最初から高い技術を持っていたわけではなく、懸命に腕を磨いた結果、名工になった」とおっしゃいました。受講者の皆さんは、素晴らしい師匠の下で学ぶ機会に恵まれたわけですので、これから何度も石橋を架ける機会があれば、もっと腕を磨けるはずだと思いました。

甲斐　講座は本会としても、さらに推進していかなければなりません。また、石橋の魅力を広め、その価値を理解してもらえる人を増やしていく必要もあると思います。そうした活動の中で、もし国への働きかけが必要なら、私も協力したいと考えています。

上塚　非常に頼もしいお言葉です。私たちが講座を始めた背景には、古い石橋の修復が必要になった場合どうするか、という非常に差し迫った事情がありました。九州には全国の石橋の９割が集中していますが、竹部師匠も現役を引退され、若手の育成が待ったなしの状況になっています。解体・撤去された後、復元が決まらない石橋がいくつもありますので、それらを復元する機会があればいいのですが、資金などの問題が解決できないでおります。

増永　国は森林の利活用を目的として、公共建築物への木材使用を促す法律を定めました。しかし、木材を自在に扱える、従来の技術をもった大工の育成はなかなか進んでいません。石橋修復技術者の育成を考えた場合、もっと多くの人に、石橋の文化財としての価値を理解してもらう環境整備が重要だと考えます。

高永　熊本には３００余り、緑川流域には約80の石橋が残っています。まさに「石橋のふるさと」です。中には、地元の方々が大切にされている小さな石橋もあります。橋の清掃や案内板の設置など、地元の方々の活動を支援することも、県や市町村の務めではないかと思っております。

上塚　人吉市の球磨工業高校には建築科伝統建築コースが設置されていますが、山都町の矢部高校に石工を養成する学科を開設できれば、継続的な人材育成ができるのではないかと思います。

下田　私は、技術者を育てられない国の未来は危ういと思います。実習で受講者の皆さんが重たい石と向き合い、黙々と取り組んでおられる姿を見て、本会は貴重な技術者を育てる大切な役割を担っているのだと感じました。

上塚　九州の建築・土木関連の研究者や技術者が中心になり、石橋の設計法と維持管理に関する研究も進められているようです。ただ、石橋が集中する九州のことを知らずに、中央では政治が進められているように感じられます。

甲斐　私が町長を務める山都町では、観光客の目に付くところだけでも、本物の石材を使った案内表示を採用したいと動いているところです。財源問題という壁がありますが、今後は国への働きかけを通じ、九州の石橋文化への理解者を増やしたいと思います。

高永　九州には木の文化とともに石の文化が根付き、各地に石橋が造られました。皆さんがコンクリートではなく、本物を求める気持ちは理解できます。これからも石橋を愛する方々と、意見交換をしていきたいと思います。

増永　私も通潤橋のある矢部郷に育ちました。お役に立ちたいと思います。

上塚　実のあるお話に感心し、今後に期待したい気持ちになれました。ゲストの皆さん、ありがとうございました。

大加勢橋の移設・保存

副会長　末永 暢雄（長崎県）

長崎県の鹿町町。海岸線が「日本本土最西端の岬」（隣の小佐々町）へと続く町で、平成22年に佐世保市と合併した。石橋について語るとき、私はこの町を〝特徴的な町〟として紹介してきた。

鹿町町にはかつて、3基の石橋が架かっていたが、現存するのは1基だけになった。現存しているのが「中野橋」。コンクリート橋に架け替えられた「宮前橋」。そして、解体・撤去され石材に番号が振られた状態で保存されていた「大加勢橋」（おおがせばし）である。石橋の現況を語る場合、①現存②消失（崩壊・破壊）③保存の3つに分類できるが、この町の3基の石橋が、まさに①～③に該当する。

文化財指定が解除に

大加勢橋は1926（大正15）年、現在の県道18号（当時は村道）に架かっていた。橋の案内板によると、「実法院芳太郎氏の施工で、幅3・7㍍、長さ11・0㍍の町内では最も立派な石橋」（鹿町町教育委員会）であった。そこで、昭和58年12月に鹿町町文化遺産文化財として指定された。

ところが、平成12年になると、県道改修のため、大加勢橋をコンクリート橋に架けかえることになり、文化財指定を解除、そして解体・撤去されたのである。私の取材では、地域の方がこの石橋を大変惜しまれたため町は、代替地に架け替える（移設・保存）と説明していたそうだ。

大加勢橋復元工事の様子　写真提供／潮音院

しかし、町の財政的問題で復元工事は実現せず、石材は町のグラウンドの片隅に放置されたままだった。そして移設・保存のめどが立たなかったため、ついに石材を処分するという話になった。

個人の力で保存が実現

この状況を憂えたのが、鹿町町の「潮音院」というお寺のご住職だった。ずいぶん以前から町おこし活動のリーダーとしても活躍され、町の文化財保護委員でもある。「ふるさとからまた一つ、大切なものが消えるのは惜しい。自分がもらい受けて保存したい」と、ご住職は町に申し出られた。そして平成19年8月、寺の境内の一角への大加勢橋の移設・復元が実現した（左下写真）。

石材には番号が振ってあり、解体・撤去の折に使われた鉄製の支保工も残っていたので、移設・復元ができたのである。ご住職は「石橋をどのように復元したらいいのか、また移設の方法は適切なのか、大変悩んだ。しかし自分としては、とにかくふるさとの大事な遺産を残すことだけを考えた」と胸中を語られた。この移設・復元の件について、鹿町町教育委員会は全くのノータッチだったそうだ。もちろんお金の面でも。

複雑な思いもよぎる

さて、こうした石橋の保存のあり方に、違和感を覚える方は多いと思われる。私もその一人である。それはアーチの持つ力学的な強さが復元されていないからである。たとえ原野に復元されたにしても、「アーチ」は虹のように宙をつないでほしい。

私もこの橋は何とか復元したいと、いろいろな場所で声に出してきたが、何もできないまま、気が付いたらお寺の境内に移設・復元がなされていた。「末永さんをもう少し早く知っておれば…」とご住職は語られたが、私の方こそ、こんな方がおられたことをもう少し早く知り、できれば移設の場所の選定や復元の方法など、一緒に研究したかった、と悔やまれる。

文化財保存活動に感謝

だが考えてみると、先人が残したすばらしい文化財は、何とか残った。石材がただの石ころになることはなかったのである。ご住職の活動に感銘を受け、感謝の念を抱きながら、再び復元された橋の前に立ってみた。潮音院の境内では上流と下流、両側のアーチが同時に見られる、こんな復元もあっていいかな、と思いながら…。

長崎県佐世保市鹿町町の潮音院に移設・保存された大加勢橋
写真提供／末永 暢雄

めがね橋の構造と強さ[2]

会員　軸丸英顕（熊本県）

写真提供
中村まさあき

地震に「強い」めがね橋とは…

今回は、めがね橋の耐震性能について考えてみます。めがね橋は石材を積んだだけの柔軟な構造であるため、地震に強いとされています。

しかし、いったん崩壊すれば人身事故につながる可能性がありますので、どんな橋なら圧縮力が緩みにくく、耐震性能が高いのかを、あらかじめ知っておくことが大事です。

(1)「強固な基礎をもつ橋

霊台橋は、緑川中流の船津峡をまたぐ橋です。アーチは両岸ともにとても固い岩盤を基礎としているので、輪石が緩む危険性はほとんどありません。

西田橋が架かっていた鹿児島の甲突川の基礎部は、岩盤ではありません。そのかわりに巨石を敷き詰め、強固な基礎を造ってアーチを載せていたことが、解体・移設をする際に確認されました。さすがに名人、岩永三五郎の仕事です。現場条件にあわせたすばらしい工夫だと思います。

霊台橋（熊本県・美里町）

(2)「輪石の締付が強い橋

馬門橋は、輪石上の厚い盛土によって、外部から輪石が強く締め付けられており、安定しています。

一方、静岡県浜松市の方広寺五百羅漢橋は、輪石だけでできたとてもシンプルで面白いめがね橋です。しかし、輪石を締め付ける外力が小さいため、地震時や重いものが載った場合にはアーチが崩壊することが懸念されます。

(3)「輪石が接着」された橋

石同士の接着力を高めることは、耐震対策としても有効です。長崎眼鏡橋の漆喰による輪石や壁石の目地の補強、諫早眼鏡橋や中国・安済橋の鉄片（だぼ鉄）を用いた輪石同士の連結などがこの事例です。

（次号へつづく）

西田橋（鹿児島市・石橋記念館）

馬門橋（熊本県・美里町）

石橋と石橋をつなぐフットパス

会員　井澤るり子（熊本県）

熊本県の美里町では「フットパス」の取り組みが行われている。これは「地域に昔からある〝ありのまま〟の風景を楽しみながら歩く」、イギリス発祥の健康レジャー。石橋が点在する美里町は、里山の風景を楽しめるフットパスのコースを複数設定している。地元でガイドを務める井澤るり子さんに随想文を寄せてもらった。（広報部）

石橋を訪ねるときには、誰もが一度にいくつかの石橋を訪ねる。橋と橋との間は、車で移動するのが一般的だと思う。地元の人から、「昔の人は、石橋ができて大変喜んだようだ」との話を聞いたことがあるが、現代ではその喜びに共感できる人は少ないだろう。自家用車が普及し、エアコン付きの車で、雨の日も雪の日も、夏でも冬でも、台風や洪水でもない限り、目的地に簡単に着くことができる。荷物の多少に関わらずである。「美里フットパス」のガイドをしながら、私はそんなことを考える。

小筵橋から、二俣橋を通り、馬門橋まで旧道を選んで歩いてみた。起伏はあるものの舗装され、歩きやすいといえば歩きやすい。歩いていくと、道祖神、馬頭観音、猿田彦碑、六地蔵などが目に留まり、途中には佐俣阿蘇神社がある。道端の山野草を見れば、ゲンノショウコ、ヨモギ、ヒキオコシなど薬草になる物も多い。

石橋が架けられた昔は、牛や馬を使える人は限られていた。頼りになるのは、自分の足だけ。病気にならないよう、天候や気候に恵まれるよう願っただろう。人間も自然の中の一員ということを知っていたのだ。日差しが強ければ木陰が恋しいし、喉が乾けば水も欲しくなる。大樹の下に祠（ほこら）があり、神社の境内には水場もある。昔の人はそこで自由に休息を取ったことだろう。

二俣橋で手でハート型をつくる参加者
写真提供／井澤るり子

田舎では、田舎の時の流れに合わせ、ゆっくりと歩くことが一番。坂を下れば上りがあり、不意に視界が開ける。都会では味わえない気分。心がゆっくりと満たされていくのが分かる。棚田が開け、季節によって表情を変える里山の風景には、住民が営々と築き上げた営みがある。

たくさんの人がコースを歩くことで、交流が生まれ、会話の中の感動により、地域の人も石橋を含めた地元の魅力を再認識し、保存活用につなげている。美里フットパスの効用は大きい。

霊台橋支保工後日譚（たん）

「支保工は使った後、燃やすとですか」という質問が出た。熊本市南区富合町古閑にお住まいの一行が東陽石匠館に来館され、私の架設工程説明を聞いた後のことだった。「燃やしたという記録は残っていませんけれど、支保工の廃材を活用して、お寺の御堂を造った話なら知っていますよ」と前置きし、私は50年以上も前に聞いたことを語り始めた。

昭和30年、私は東砥用（現在は熊本県下益城郡美里町）のSさん宅に下宿していた。年の暮れに川尻町の寺からお取り越しの僧が見え、「私が預かっている寺の御堂は、霊台橋を造ったときの支えの木材で建ててあります」と話された。川尻と東砥用は約25キロ離れており、檀那寺と門徒の家にしては遠過ぎる。その理由を尋ねると、川尻の寺は以前、甲佐町仁田子（にたご）にあったそうだ。そこなら霊台橋からの距離は約8キロ。その距離ならと、うなずけた。

下から仰ぎ見た巨大な霊台橋のアーチ
写真提供／上塚 尚孝

Sさんの先祖は霊台橋を設計した伴七（はんしち）だった。甲佐から川尻へ移転した寺の建立は1854（安政元）年。霊台橋（1847年架橋）の支保工の廃材は、寺の建立前に再利用の話が成立し、筏（いかだ）に組んで緑川を下り、川尻町大渡（おおわたり）の水路に保管してあったようだ（伴七の日記より）。私がその寺の名を「金仙山正行寺」と話すと、世話役らしき方が「私どもの集落の中で20軒ほどが、その寺の門徒です」とおっしゃる。道理で話の聞き方が熱心だった。

「余談になりますが…」と私は話を続けた。「昭和20年に緑川鉄橋を狙った米軍機の機銃掃射が外れ、御堂の屋根に当たったため、天井に雨漏りの後が見られます。お寺参りの折りにご覧ください」。すると前列の方が、「改修したけん、天井板は全部、新しゅうなっとります」「各戸5万円寄付しました」と説明された。私は「それなら霊台橋の支保工材は、やっぱり焼却処分されているでしょうね」と話した。

（2012年5月6日）

あとのおたのしみ

宇土半島南岸の古い港町、松合（熊本県宇城市不知火町）に、かつては目鑑橋が4基あった。そのうちの1基は、1999年の台風による高潮災害後に解体された。1867（慶応3）年に架設され、橋の名は「須ノ前橋」（すのまえはし）という。

この橋を復元する計画が進行しているということで、宇城市の担当者とともに、建設コンサルタントの中村秀樹さん（日本の石橋を守る会会員）が東陽石匠館へ来館された。

復元計画の図面を見せてもらうと、河川改修工事で川幅が狭くなっているが、以前の架設位置に基礎石を高くして復元し、安全対策のためアーチ上には勾欄（こうらん）が新設されるそうだ。

それから2カ月ほどして、来館された中村さんから勾欄のデザインが検討されているという話を聞いた。私は即座に、橋本家文書類の中にあった束柱（つかはしら）のデザインを思い出し、ケント紙に同サイズに作成していた勘五郎考案の型紙を「よかったら、これをお使いください」と差し出し、「勘五郎さんは弟の甚平さんと松合に仕事に行っていた記録も残っています。当地の郷土史家、嶋谷力夫さんもそのことをご存知です」と伝えた。私の話を聞いた中村さんは悩みの一つが解消できたと喜んでくださった。

橋本勘五郎考案の束柱を型紙にしたもの

桜が散り始めたころ、中村さんは再度、石匠館に見えられた。今回は親柱の件だった。「不知火町（熊本県宇城市）には、炎のような不知火をデザインした町章があったので、それを親柱の上に擬宝珠（ぎぼし）代わりに載せられたらどうですか」と提案し、アイデア・スケッチを描いて示した。

今年中に復元工事が完了すれば、渡り初めの折りに本体を眺め、勾欄に触れる楽しみが待っている。

（2012年4月13日）

榎木 孝明「壊れた橋」
画集「浪漫旅」ビジョン企画出版社より

石橋のある風景

エジプトからナイル川をさかのぼると、隣国のスーダンで川は、白ナイルと青ナイルに分かれる。俳優の榎木孝明さんは、青ナイルの源流に向かう旅の途中、エチオピアで3つの石橋と出会った。現地で「壊れた橋」と呼ばれる石橋は、300年ほど前に架けられたといわれる。どこから技術が伝わり、どんな人たちが架けたのか…、興味は尽きない。（水彩画）

俳優、榎木孝明・画集
石橋を探し ナイル川源流への旅

榎木孝明さんのナイル川をさかのぼる旅は、約5000キロに及んだ（昨年12月24日、NHK総合テレビ「ワンダー×ワンダー」で放送）。下はその旅で、榎木さんが描いた風景を収めた画集。エジプト編とエチオピア編の2部構成になっており、現地の風景が水彩画で描かれている。エチオピア編では、3つの石橋も紹介されている。

浪漫旅
エジプト、エチオピア
榎木 孝明　著
ビジョン企画出版社
2012年6月26日　発行
定価（本体1,680円＋税）

街道に架かる石橋

藩政期の肥後には、熊本城内を起点に九州各地へ向かう四筋の街道が延びていた。北の豊前・小倉へ向かう豊前街道。南の薩摩・鹿児島へ向かう薩摩街道。東へ向かう街道は二筋あり、一筋は豊後・鶴崎の港へ向かう豊後街道、もう一筋は日向・延岡へ向かう日向往還（※おうかん）。道沿いには石橋や石畳などが点在し、宿場町の面影を残すまち並みにも出会える。

そうした歴史・文化遺産を顕彰・保存し、今後の地域の発展に役立てようと5年前、熊本四街道連絡協議会が発足。今年は3月17日に熊本・山都町でシンポジウムが開催され、甲斐利幸・山都町長（会長）が出席。東陽石匠館の上塚尚孝・館長（事務局長）の「日向往還沿線の石造目鑑橋」と題した講演が行われた。

熊本城下から日向との国境まで、往還沿いには13の石橋が点在する。橋本勘五郎が架けた「明八橋」（熊本市中央区、1875年）、輪石をつなぐダボ石が特徴的な「門前川橋」（御船町、1808年）、林田能寛が私財を投じた「八勢目鑑橋」（御船町、1855年）、岩永三五郎が架けた「聖橋」（山都町、1832年）―など、上塚館長はそれぞれの石橋にまつわる史実を披露した。

日向往還に架かる八勢目鑑橋に続く石段と石畳
写真提供／中村まさあき

シンポジウムの後半は、熊本大学の山尾敏孝・教授（会員）がコーディネーターを務め、四街道での〝地域おこし〟の事例も発表された。ちなみに同協議会の事務局長は中村秀樹・会員。

また同日は、あいにくの雨だったが、かつての往還を歩く「日向往還歴史ウォーク」も開催された。これらのイベントは、石橋を街道という視点で見つめてみる、絶好の機会となったようだ。（広報部）

※往還も街道も藩政期の主要な道路だったが、藩主が通る参勤交代の道を街道と呼び区別していた

編集後記

第33回大会のシンポジウムでは、石橋修復技術者を育てる仕組み、事業に必要な資金、石橋を文化財と考える理解者を増やす努力などが、課題として挙げられました。その一方で、熊本・美里町のフットパス事業や熊本四街道連絡協議会のように、石橋を含む地元の歴史・文化遺産を資源に〝地域おこし〟を図っているグループの活動があり、首都圏では常磐橋（東京都）の保存に危機感を抱く人たちがいることも報告されました。

石橋のある景観や地元の文化を大切にする、そうした人たちの心情に寄り添うことができる会報内容にできれば…、との思いを強くしました。

（会報担当　中村まさあき）

日本の石橋を守る会
～石橋とその文化を大切に～

会報81号（通算）　2012（平成24）年7月20日発行

代表者　会長　甲斐 利幸
事務局　〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
通潤橋史料館内　☎0967（72）3360
HP　http://www10.plala.or.jp/narit/
BBS　http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/